

防 災 林 雑 感

広 谷 巍

10月下旬に小滝元林務部長のおともをして道北の西海岸と道南の防災林をみる機会を得て、道南、道央に較べて、道北の防災林の造成がより多くの問題をかかえていることが身にしみて感じられた。

北海道民有林の防災林の造成にあたっては、一般的に用地取得の困難性と、内地のクロマツに代る樹種が見つからないこと、植栽後の保育管理が十分行なわれないことがあげられる。

第1の用地取得は行政的な処置を要するが、環境が悪くなる程、林帯の巾を広くする必要があり、必要な用地の取得と、造成技術の確立は車の両輪のごときものであり、両に相まって成果をあげることができるであろう。

樹種の問題は内地の海岸林ではクロマツが中心であるが、道内でクロマツの適地は道南のみで、他の地方ではこれに代る樹種がみあたらない現状である。そのため各樹種が試植され、ヨーロッパアカマツ、バンクスマツなどの外国樹種も植えられた。これらは初期生長は悪くないが、防風垣をでるようになると枯損がでて不成績となり、以降の生育の見通しはくらい。かつてこの地方は海岸まで針葉樹林であって、山火などによって消滅したということや、サロベツ原野の海岸沿いの砂丘林はトドマツを主林木とする天然林であることからみて、この地方の海岸林はトドマツが主林木になると考えられる。トドマツはクロマツよりも若干塩風に弱いから（ニホンアカマツと同程度）最前線は無理で、内側に少し入ったところから成立し、最前線はカシワなどの広葉樹であろう。大事なことは造成する場所がかつてどんな姿であったかを知ることである。過去にそこが森林であったのなら造成は比較的容易である。広葉樹では最前線はヤナギ、ナラなどで、そのほかセン、イタヤ、キハダ、ハンノキ、アカシヤ、などがある。周辺にある樹種を植えるのが第一で、まわりの天然林の構成樹種をよくみて、多くの樹種を混植すべきである。トドマツは全道に分布しているが、産地によって寒さに対する抵抗性などにかなりの差のあることが判ってきた。日高から根室にかけての太平洋側のものは日本海側のものよりも寒さに強く、北見地方はその中間である。防災林は特に環境条件が厳しい点を考えると、これに使用するトドマツは道東産のものを使う方がよいと思われるので、現地で産地の比較試験を行ないたい。グイマツも道北では成績がよいが、塩風にはトドマツよりも弱く、また先枯病にかかりやすいので、海岸に近く塩風の直接あたるところは不適である。保育管理の問題は地元で事業がまかされるため、手おくれになるケースが多いようであるが、省力をはかって除草剤の使用を考えるべきであろう。また植付も等間隔よりも数本を密植して巢植にした方が保護上有利である。防災林の造成は未解決の問題を多くかかえているので、現地と協力して事業にさきだって積極的に試験をすすめてゆきたい。

(研究第二部長)